

岡崎市制100周年記念事業
岡崎まちものがたり：六ツ美南部 M-26

岡崎の歴史物語

この資料は「岡崎の歴史物語」からの抜粋である。

岡崎の歴史物語

発行日：昭和50年3月1日、著作者：岩月 栄治 編集発行：岡崎の歴史物語編集委員会

印刷所：研文印刷社

「岡崎の歴史物語」の169頁に「占部の掘割り」江戸のはじめのころ と題して占部用水の話が掲載されている。

占部の掘割り

江戸のはじめのころ

水量豊かな矢作川が、岡崎の平野をゆったりと流れる中で、占部（国正町・中村町・定国町正名町の一帯）の農民は、水に恵まれず、作物を生産するのに苦勞していた。

慶長のはじめごろ、祖先が、武門のほまれ高い源頼光につかえたという正名の野本新十郎と、中村の渡辺弥藏は、水に恵まれない農民の窮状に心を痛めていた。日照りのため、ほとんどの作物が枯死して収穫すべきものがなく、食うことにことかく農民の姿はあわれであった。

「占部の地に、田畑はあっても用水路がなく、雨水だけがたよりの天水場では百姓たちも不安だろう。」

「年貢米の取りたてができなくなったら、それこそたいへんだ。」

「近くにある矢作川の水を、何とか占部の地に引きたいものだ。」

「用水路を作ればよい田ができ、生産もふえて、百姓が喜ぶにちがいない。」

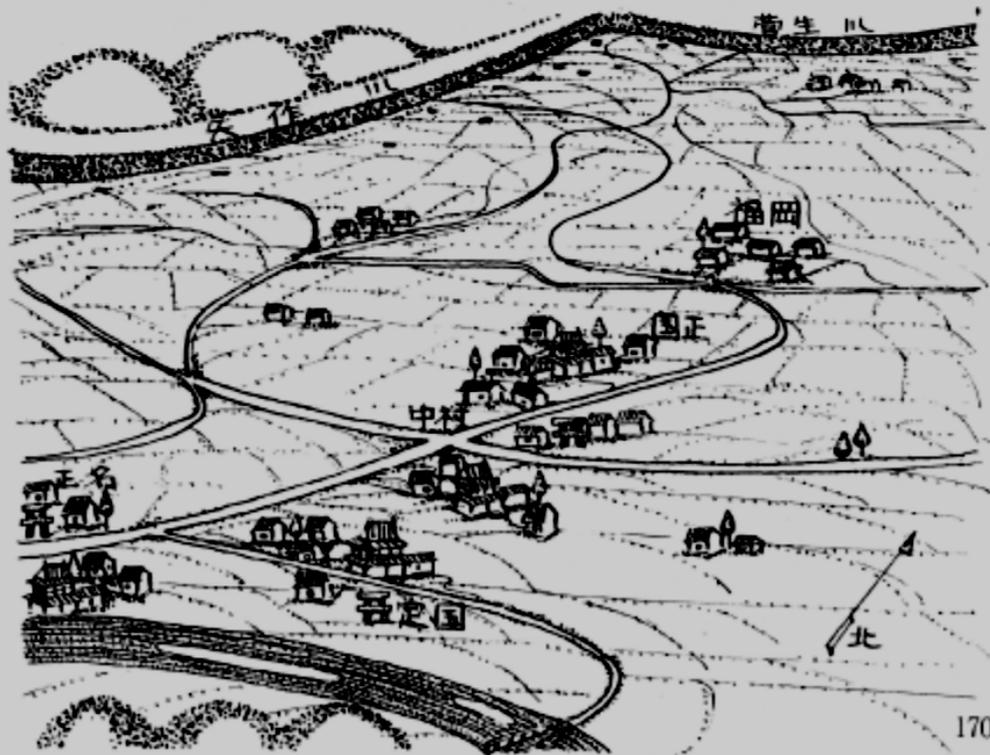
ふたりは、農民が困りはてているようすを見るにしのびず、しんげんに話し合った。

「野本氏、百姓たちのために、一はだ脱ごうではないか。」

「おお、渡辺氏、占部の百姓たちのために用水路を作るとは、わしも大賛成じゃ。」

困っている農民を救うため、ふたりは意気投合し、手を強くとりあって用水路開発への決意を固めたのであった。

慶長三年、領主に用水路開発を願い出たふた



りは行動を開始した。

まず水の取り入れ口をどこにしたらよいか、慎重に考えた。その結果、矢作川と乙川（菅生川）の合流点で、水量の多い天白町（旧福島新田）地内に決めた。そこから、古部の地に至る延長約八キロの水路開発を計画したのである。

仕事にとりかかると、農民のあいだから、反対の声があちこちに高まった。ふたりにとっては、全く心外であった。

「百姓たちのことを思って始めたのに、反対するとは何事じゃ。」

「百姓どもは、何が不満だろう。水はいらないというのだろうか。」

農民から喜ばれ、積極的な協力が得られると思っただけに、怒りがこみあげてくるのを、どうすることもできなかった。

農民たちの反対の声は、なかなか根強いものがあつた。

「用水路を作ると、たくさん金がかかるでう。その金は、おらたちが出すんだから、たまつたもんじゃねえ。毎日の暮らしが、ますます苦しくなるにちがいねえ。」

「金もかかるが、手間もかかるでう。工事にかり出されたら、田の草もとれなくなつてしまふがな。」

「うん、そうだそうだ。それに用水路を作ると、そのぶんだけ土地がつぶれ、むかしからだいにじにしてきたおらの土地が、少なくなってしまうがな。」

「堤防が切れて、水びたしになることも考えられるでろう。」

自分の利益だけを強調する農民は、用水路開発に賛成しようとしなかった。ふたりは、農民の無関心さに憤りをおぼえながらも、おだやかな表情で、

「みなのお衆、長く雨が降らず、作物が枯れてとても困ったことをおぼえてるだろう。用水路ができれば、雨が降らなくても枯れるようなことはないのだぞ。」

「用水路ができれば、水がほしいときに使えて、作物がたくさんとれるようになることはまちがいなしだ。雨水だけがたよりの天水場ではなくなるのだ。」

「用水路は、掘割りにして水量の調節もできるようにするから、堤防がきれる心配はない。声を大にして、農民の反対の声をやわらげようとした。農民のなかには、

「用水路を作るために、つぶれる土地はどうなるんじや。」

と、たたみかけてくる者もいた。ふたりは、声を大にして語気を強めた。

「替地がほしいというならやろう。おまえたちに悪いようなことはしないぞ。」

「よく聞いてくれ。おまえたちのことを思ってこそ、用水路を作ろうとしているのだ。おれた

ちの気持ちをおわかってくれ。」

反対する農民を説得するため、ふたりは、寝食を忘れて奔走し、協力を求めたのである。しかし、農民の反対や不安を消し去ることはできず、ふたりはほそほと工事に着手した。

仕事が進むように進まず、思案にくれることもしばしばあった。工事を中断しようか、腹かき切って死のうかと思つたこともあった。こんなとき、

「用水路完成までは、絶対に死ねんのう。」

「おお、命の続く限りやり抜こうではないか。」と、たがいはげまし合いながら、開発の信念をふるいたたせたのであった。また、工事費などに、四苦八苦する状態も続いた。

ふたりは、持っていた金品はもちろんのこと



田畑、山林などすべて売りはらい、工事費につきこんだのである。

野本新十郎と渡辺弥蔵が手がけた用水路開発（占部用水本流八キロ）は、五年間を費やして、慶長八年にやっと完成した。その年、幕府はふたりの功績を認め、占部四郷以外の村が用水を必要とするときは「一か村につき五百文渡すこと」「くいが必要なときは、代官地頭が責任をもつこと」などを決めた御墨付を渡した。

ふたりにとって待望の用水路は完成したが、生活は完全に破かいされ、妻子とは別れ、家名も絶えてしまった。竣工後、用水路にかけられた橋をだれいうとなく思案橋と呼んでいる。

ふたりの遺徳をしのぶため、正名町の永応寺で、毎年春さきに水恩忌が開かれる。

厳肅な読経の中で静かに目を閉じると、ふたりの占部用水開発における苦悩が目に浮かんでくる。また、遠く広がる田園には、青々と早苗が植えられ、秋の取り入れときには、一面が黄金の波につつまれて、満ち足りた表情をしている農民の姿も浮かんでくる。

思案橋の下を流れる占部川の水は、むかしも今も何事もなかったかのように、ゆっくりと静かに流れている。

（文・杉浦尚夫 絵・小久保敏子）